

「伊達ちゃん、伊達ちゃん」

朝の喧騒の中左斜め後ろの席から呼ばれる。

「SF。何だよ佐助」

俺は俺を呼んだヤツに振り向きもせず返事をした。視線は手元の文庫本に落とすままだ。「あのさあ、俺様の実家、長野じゃん？ 知ってるでしょ」

この高校に入ってから三年間一緒にいたんだ。そんな事は知りたくなくとも知ってしまったている。大体、ここは家庭の事情や成績優秀者、Sportの特待生などなど、越境入学者の多い事有名だ。

中には遥か遠く海を渡ってきたヤツもいる。かく言う俺も東北からの越境入学者だ。いや、正確に言えば帰国子女枠で入学だから、一番遠くからの入学者は俺なのかも知れないけれど。

実家は東北だが、小学生から中学生までを海外で過ごしていたので、正直、東北随一の名家の出身と言われてもピンと来ないし、両親の顔もあまり覚えていないくらいだ。

なぜ俺が帰国子女なのかと言えば――。

*** **

俺は幼稚園の時に事故に遭い、片目を失った。

地元じやかなりの名家だという我が家は、親父は大らかで人当たりの良い人物だったが、母親はいかにも、ってタイプの上流階級を意識した、所謂お嬢様だった。

その母親は自分の腹を痛めて生んではくれたが、片目を失って醜く引き攣れた右目を見るたびに俺を疎んじるようになった。そして彼女の愛情は弟へと一心に注がれるようになり、俺は家庭内で孤立して行った。

親父はそんな俺を右目を失う前と同様に、いや、それ以上に可愛がってはくれたが、何せ大企業の社長だか会長だかだ。忙しさの余りに滅多に家で顔を合わす事はなかった。そんな時、親父が重用していた片倉と言う社員の息子が俺の家庭教師に就いた。

親父が言うには父親も素晴らしい人物であり、その息子―名前を小十郎と言う―も文武両道、その年に主席で地元の進学校に入学したと言う。それを聞いて親父は俺に不自由しないようにと、その息子―小十郎―を家庭教師に就けてくれた。

確かに小十郎は優秀で、俺が片目のない醜い姿でも分け隔てなく、いや、寧ろ弟よりも大切に接してくれた。俺とはちようど十歳離れていて、俺にとつては憧れていた兄貴ができたような、そんな気持ちになった。

いつでも呼べばすぐに来て、「政宗様」と俺に対して膝を折るような、そんなヤツだった。

そして、俺が幼稚園を卒園して小学校に入学する年に小十郎は留学する事になった。

俺は幼稚園の同級生たち―片目の俺を遠巻きにからかったり嫌悪するような連中―がそっくりそのまま入学する小学校行きを拒否して、小十郎についていきたいと、いつになく我俣を言った。多分、右目を失ってから初めて言った我俣だったと思う。

それまでは引っ込み思案でおどおどとした、いつ母親の逆鱗に触れるのか、そんな事ばかりを考えていた子供だったと思う。

俺は小十郎に剣道の稽古をつけてもらって、勉強だって教えてもらって、その年代の子供たちの中ではかなり優秀だった方だ。文武両道になって右目がないというハンデを克服したかったし、いい子にしていれば母親から叱られる事もないと思っていたから。

その甲斐があつてか、親父は「今から世界を知っておくのも将来人の上に立つ者として、いかもしいれない」と賛成してくれたし、母親は体よく厄介払いが出来る事で、諸手を上げて賛成した。

小十郎は俺には逆らわない。寧ろ親父に「政宗の事をよろしく頼むよ」なんて言われて、誇らしげだった。

そんな事があつて、俺は六歳から十四歳まで海外暮らした訳だ。

今じゃ英語混じりの日本語を喋っちまうぐらい、あっちの水は俺に合っていた。

だが、小十郎が向こうの大学を卒業、親父の会社に就職するに当たって帰国。俺もちようど日本の高校に入学できる年齢だった事もあつて、同時に帰国してそのままこの高校に入学した。ここは都内でも郊外に立つ文武両道を掲げたマンモス高だった。ここなら俺の片目が無い事

も人混みに紛れて目立つまいとも思った。

小十郎が親父の会社の本社勤務で東京に住む事が決まっていたから、そのまま一緒に暮らすって事で、了承を貰った。

けれど、実際は小十郎は殆ど家に帰ってこない。忙しいらしい。だから殆ど一人暮らしみたいなもんだけど。

もうあの頃のようなガキじゃねえから、寂しいだとかは思わないが、たまにはゆっくり休ませてやりてえなどは、思う。

俺がそんな事をぼんやり思っていると、佐助がまた声をかけてくる。

「伊達ちゃんってば、聞いている？」

この佐助—FujiName—is 猿飛佐助—というヤツは、入学してからずっと同じクラスで、付かず離れずの仲だ。地毛だと言う赤みがかった長めの髪の毛にヘアバンドがトレードマーク。頭の回転も速いし、運動神経も良い方だ。けど何故か帰宅部だったりする。何だかいつも飄々と歩いて掴み所はないが、人当たりもいいし、俺は嫌いじゃなかった。

ただ、コイツの軽さには馴染みきれなかったが……。

「Ah? 聞いているぜ? アンタが長野の田舎から出てきたって話だろ？」

若干揶揄い混じりに返事をすれば。

「まあ、海外から見れば長野は田舎かも知れませんが。そういう伊達ちゃんだって実家は東北じゃん。宮城だっけ？」

揶揄われても不貞腐れたりはしない。冗談だと分かっている冗談には冗談で返す事ができる、

佐助はそんな少し大人びたところがあるヤツだ。

「まあな。でも俺は宮城にいたのはほんと、僅かだぜ？」

「知ってるよ、小学校から中学いっぱいまで向こうだったんでしょ」

「ウチのガッコじや有名だからな。伊達ちゃん」

頬杖をつきながら笑う佐助に顔を上げる。

「有名？ 俺が？ この片目のせいか」

とんとん、といつもしている眼帯を人差し指で軽く叩いて笑ってみせる。

本当は、聞き流せる程俺は未だ大人になりきれていない。それでも、この程度ならばまだ、笑って答えられるぐらいには、気にしないようになった。

「いやいや。まあそれも目立つちやうかも知れないけどさ。文武両道の美人だって一年の時から有名だぜ？」

佐助は、こういう時は傷に触れない。分かってくれているのかも知れないし、自然と人を傷つけるような真似を避けられる能力が高いのかもしれない。そして、時々一言多い。

「Ah-h? 何だそりゃ。こんな醜い面してる俺が美人？ Hai 冗談が過ぎるぜ」

「どうせ言うなら Handsome だろうが」

そう言って自嘲すれば。

「ん。まあ、それは……ね？ 伊達ちゃんは自分の事分かってそうで分かってないなあ」

と、佐助にちよつと困ったような顔をして笑われる。

何だよそりゃ。俺は自分の事分かってるぜ。小十郎に鍛えられて、そりゃあ剣道の腕は立つ

ぜ。頭だつていい方だ。だが、美人なんかじゃねエ。冗談で Handsome なんつたが、それだつて本気で冗談だ。分かつてる。——分かつているんだ。

どれだけ頑張つたつて手に入れられないものがあるつて事ぐらい。

「ほらほら。眉間に皺。せつかくの美人が台無しだぜ」

佐助にきいっと知らないうちに寄つていた眉間の皺を指で押される。

「伊達ちゃんさ、右目、気にする程じゃないよ。それね、もし右目があつたら美人過ぎて困るから。隠れてるぐらいでちょうどいいよ」

なんて、慰めているのか馬鹿にしているのか分からないような事を言われる。

「Ha! そうかよ。じゃあ、せいぜい俺に惚れないようにしとけよ。 You see?」

ぴっと人差し指を向けて口端を上げれば、あはは。俺様は、伊達ちゃんに惚れたりはしないよ。あ、人間的には好きだけどね? なんて言つてきて。

内心で shit! と毒吐く。そんな事言うな。俺は褒められるのに慣れてねエんだよ。

他人に褒められるなんて事は、滅多になくて、俺はそう言う事に弱かった。親に手放して褒められたりした記憶が余りにもないのが、原因かも知れないけれど。

黙つて手元の文庫本に再び視線を移すと、佐助がまた声をかけてきた。

「照れちゃつて。伊達ちゃんそう言うところ、可愛いよね」

と、けらけら笑われる。

俺は一回苦手な状況に嵌ると中々抜け出せない。取り繕う事ができねエからだ。コイツはそれが分かつててこうやって揶揄ってくるから質が悪い。

余裕がある時と、ない時のギャップが激しいのが俺の目下の悩みのタネだ。

「煩エな。オメーが余計なこと言うからだろ」

やっとの事でいつもよりも威勢のない悪態を吐く。畜生。俺を慕ってくる弟分みたいなヤツラの前じゃこんな事絶対にねエのに。

悔しくて耳が熱くなるような気がしていると。

「でさあ、さっきの話。長野のさ」

コイツは本当にマイペースだ。俺の悪態なんかきつと屁でもねエ。飄々と躲して自分の話をしだす。

「あのね、俺様さ従兄弟がいるんだ。タメの」

「それがどうしたんだよ」

「俺様その従兄弟の事旦那呼んでるんだけど。これから旦那で通すね。従兄弟とか呼び難いし」

「旦那？ 何だそりゃ。まアオメーの呼びやすいのでいいんじゃないか」

俺は変な渾名だなどと思ったが一先ず佐助の好きにさせる事にした。気になったらあとで聞けばいい。

「うん。でさ、その旦那なんだけど、俺様がココ受ける時に一緒に行こうよって誘ったんだけど、都会は嫌だとか言っちゃってさあ。結局向こうに残してきたんだけどね。でもさ、その旦那がこっちの大学にスポーツ推薦で受かっててさあ」

「それが何だよ。めででエじゃねエか」

「いや、それはそうなんだけど。でき、俺様がこつちで下宿してる大将……武田の道場あるじやん？」

「Ah、あのオツさんか。それがどうした？」

「旦那さ、大将の事凄く慕ってて。実はココ受けるのも大将の所には行きたいけど、都会は怖いって言って諦めたワケでさ。何て言うの？ 正直大将の所に早く来たいワケよ」

「でき、こつちの大学スポーツ推薦で受かっただろ？ そしたら勢い付いちやってさ。今日転入してくるんだー。ココに」

ひと息に喋った佐助に、へーと返事を返しつつ、思考を巡らせる。

今は一月。こんな半端な時期に、しかも受験生が転入など、普通なら考えられない。だが、佐助曰くはその旦那とやらはもう受験すらない悠々自適のご身分だ。それならばどこへ編入しようが本人の自由だろう。

因みに、俺も既に推薦が決まっている。尤も普通に受験したって受かる自信はあるけど。佐助も俺と同じ大学に推薦で決まっていた。学部は違うが高校を卒業してからも腐れ縁だ。

「旦那ね、俺様たちと同じ大学なんだぜ。驚いちやったよ。あんまりお勉強は出来ない子だったけど、運動神経は抜群だったからなあ」

何だか佐助がしみじみとしたーそう、まるで母親のようなー表情で遠くを見つめる。

「Hm、んで、そいつ今日くんのか」

「うん。クラス聞いてなくてさ。同じクラスになりたいような、なりたくないような……、」
珍しく佐助が弱気だ。何だか不思議な感じがした。コイツはいつだって自信満々で、自分で

自分の事を俺様なんて呼んじやうようなヤツなのに。

「どんなヤツなんだ？」

他意もなく単純に聞いてみた。

「ん、うーん……」

珍しく饒舌な佐助が口籠る。何だか少しだけ興味が湧く。

コイツをこんな風に困らせる事が出来るヤツってどんなヤツだ？ そんな風に思っている
とHR開始のチャイムが鳴り響いた。それと同時に小さな集団がバラバラと自分の席に戻り始
め、朝の喧騒が次第に消えていく。と、同時に前のドアが開き担任が入ってくる。

担任はぐるっと教室を目で追うと、欠席はないようだなと簡単に出席を取った。

そのあとに今日は転入生がいると続け、ザワザワと一瞬にして煩くなる教室。

みんな一様にこんな時期に？ とか、珍しくねえ？ などと、囁きあう。

俺の斜め後ろの席の佐助はアチャーとか何とか言いながら額を手で覆っていた。

けれど、俺は内心Big One とガッツポーズを決めていた。あの飄々とした佐助を困らせるヤ
ツなんて、いい屈屈凌ぎなりそうじゃねえか、と。

そうしてどんなヤツだと身構えていれば、真田、入れと、担任の声がかかる。

ふーん。真田、ねえ。

担任に呼ばれてがらつとドアが開くと、颯爽と、そう、本当に颯爽と、としか言い様がない
感じの歩みで少し赤茶けた癖毛になぜか後ろに一房、犬の尻尾みたいな毛を結んだどんぐりみ
たいな目をしたヤツが入ってきた。

ヤツはつかつかと担任の横まで来ると、自己紹介をしなさいと促され、黒板に自分で真田幸村とお世辞にもキレイとは言い難い、力強く素直そうな字でカツカツと書いた。

「某は真田幸村。このたびこちらの大学に受かったゆえ、早くにこちらの生活に慣れようと思ひ、従兄弟のいるこの学校へ転校して参り申した」

俺は内心ずるつとコケそうになった。何だコイツ！ 何だコイツ！ 何時代のヤツだよ！ あんなIdiotみたいな顔しやがって、某だと？ 背筋をピンと伸ばしてはきはきと自己紹介をする真田には悪いが、俺は腹が痛くなりそうな程笑いを堪えた。

斜め後ろから溜息みたいなものが聞こえたが、そんなのは空耳かも知れないと思える程驚いた。

担任も若干啞然としていたが、そこはそれ、神妙な面持ちを崩さずに、再び教室を見回す。「真田も受験が終わっているようだし、受験が終わっている連中の近くがいいだろう」

「伊達、お前今隣いないよな？」

「Yep.」

担任の言葉に短く応える。

ウチのクラスは受験組みに配慮して後ろの一角に受験終了組みが固まって配置されている。俺の席はその中でも窓際から二列目の後ろから二列目。佐助が窓際が一番角。俺の両隣は窓側に石川からの越境入学の前田慶次という大柄の男がいるだけで、俺を挟んでその横は空いていた。

この前田慶次と言う男も中々面白い。ちよつとお祭り好き過ぎて姦しいところはあがるが、気

さくで、裏表のないいい性格の持ち主だ。ココへは兄夫婦の家から通っているらしい。何でも兄貴の嫁とやらが心配性で両親がいない実家に慶次だけを置いておくのが心配で、こちらに呼び寄せられたと聞いた。

「そこなら猿飛も近いし、いいだろう」

俺の返事を聞いて頷いた担任は、一応佐助が従兄弟だと言う事を知っているらしかった。

佐助がひらひらと手を振って、旦那同じクラスだね、と言うと、クラス中が佐助に注目する。慶次もえ、従兄弟って佐助の事だったの？ などと振り向いて声をかけている。

佐助が、うん、まあね、なんて答えていると、前の方からこれでもか！と言わんばかりの大声で佐助え！ よろしく頼むぞ！ とあの真田が手をぶんぶん振っていた。

「ちよ、何だあの大声。煩えヤツだなア」
俺は思わず本音を漏らしていた。

斜め後ろから伊達ちゃん、ごめんね。あれ、ほぼ旦那の地声だから。無意識なんだよね、と佐助が両手を合わせてウインクしてくるけれど、思わずチツと舌打ちしてしまったのは、しようがないと思つて欲しい。それぐらい大声だったのだ。

担任もさすがに耳が痛いらしく、片方の耳を手のひらで覆いながら片方の手で俺の隣を指差し、真田、そこがお前の席だ。伊達、慣れるまではよろしく頼むぞ、と続け様に指示を出した。

真田は教室に入ってきた時と同じように颯爽と歩いて俺の隣に来ると、伊達殿と申すのか。某は真田幸村。以降よろしくお頼み申す！ と言つて手を差し出してきた。

俺はまたあの武士口調にツボつて、くっくくくと込み上げながらも、ヤツの手を握り返して

やった。本人はきよとんとしていたが、慶次のヤツも、ニヤニヤと笑いを堪えるような顔をしている。

「アンタ、威勢がいいなア。俺は伊達政宗だ。よろしくな」

右側に座った真田に一応自己紹介などして。

「俺はこの通り右目が使えねェんだ。こっちは死角だ。アンタ、用事があつたらなるべく俺の正面か左側から来てくれ」

と、いつものように先手を打つ。

「その目はどうした？」

と初対面の人間に毎度毎度聞かれるのになんざりしていた。だから、いつも自分から先に言うてしまう。そうすれば案外言われた相手は、それ以上は聞いて来ない。

案の定真田も分かり申した、と一言言っただけだった。と、思いきや、空席の都合とは言え、右側の席になつてしまい申しわけござらんと頭を下げた。

俺は思わず口笛を鳴らした。こんな珍しいヤツ見たことねエ。口笛を鳴らされた本人はきよとんとしていたが、俺が親指を立てて見せると、はにかんだような顔をして俯いていた。

それが、俺と真田の first contact だった。

初日は、教科書が違うという理由で全教科俺が見せてやった。佐助が言っていた通り、お勉強は苦手なよう。

早速物珍しさで、嫌味な英語教師が真田を当てきて、真田は英語が特に苦手だったらしく簡単な英訳すらしどろもどろで、俺は日頃からこの英語教師が気に食わなかったのもあって、

真田の代わりに答えてやった。当然、発音だつて完璧だ。ぐつと詰まった教師に鼻を鳴らせば、隣の真田が丸い目をさらに丸くさせて、忝いと礼を言つてきた。

「どうつて事ねエよ。あのヤロー気に食わねエだけだ」

「Hey! アンタ、弱いものいじめはみつともないぜ？」

ついでに付け加えてやると英語教師は真つ赤になつて終業のチャイムと同時に出て行つた。

「伊達ちゃん！ かっこいい！ 俺様やつぱりさっきの前言撤回してもいい？」

佐助が斜め後ろから身を乗り出してくる。

「W? 何をだよ」

俺は分からずに聞き返す。

「ほら、惚れないよ。つて話」

「何々？ 政宗恋してんの？」

惚れる、という言葉を聞いて恋バナ大好き慶次も身を乗り出してくる。

「W! お前は俺には惚れないんじやなかつたのかよ？」

佐助に笑いながら答える。

「慶次、俺は誰にも恋なんかしちゃいねーぜ」

お祭り男が騒ぎ出す前に釘を刺しておく。途端に慶次は項垂れた。

「いやー。今の伊達ちゃんになら惚れるよ！ あのセンセ、顔真つ赤だつたじゃん！ スツ

としたよ」

「うんうん。俺もいっつも難しいところで当てられて苦労してたんだあ。ほんと、政宗のお陰

でスカツとしたわ」

佐助が言うと、項垂れていた慶次も乗ってくる。俺は左側に体を向けてしまっていたので、真田がどんな表情をしているかは見えなかったが、なぜか佐助がうわっ！ やばっ！ と口走ったので、視線の先を追いかけて振り向いてみた。

その先には顔を真っ赤にして口を真一文字に引き結んで拳を握り締める真田の姿があった。「さ、佐助え！ 惚れるとは、何事だ！ は、破廉恥でござる！」

「またもやあの大声で今度は破廉恥ときた。俺は思わず吹き出してしまった。」

「アンタ、ほんとに面白いよなア」

振り向いて笑いかけると、更に頬を染め上げた真田が固まった。

「佐助、……お主は伊達殿に惚れておるのか？」

固まったまま真田は佐助に問いかけた。佐助は、ニヤニヤしながら（コイツはニヤニヤしているのが割りと default だが）、んー？ どうかなあ？ などと惚けていけば、あ、アンタ佐助の従兄弟の真田幸村サン？ 俺、前田慶次！ よろしくな。慶次って呼んでくれよ。俺は幸村って呼んでもいいだろ？ などと空気を読んでいるのか読んでいないのか分からない慶次が、さりげなく自己紹介している。そうすると今まで黙って座っていた俺の真後ろのヤツが本から顔を上げた。

「我は毛利元就。短い間だろうがよろしく」

「おい、元就、オメーはいつも愛想がねえなア」

本から顔を上げた元就が挨拶していると、その横で今の今まで寝てたヤツも、起き出してき

た。

「俺は長曾我部元親。元就とはこんな小つせえ頃からの付き合いよ。無愛想だけど根はいい奴だから俺共々よろしくな！」

と、人好きのする笑顔を向ける。

真田は未だ呆然として固まっていたが、佐助に旦那、と言われてハツとしたように、前田殿、毛利殿、長宗我部殿。よろしくお頼み申す。某の事は幸村と呼んで下され、と順番に挨拶をした。

三人はそれぞれにおう、よろしくなだとか、ふん。私の事は元就と呼んでも構わぬだとか、返事を返して。

それを聞いて、俺も伊達殿はちよつとな、と思つて。

「真田、俺も名前、呼び捨てでいいぜ」

と再び声をかけてみた。

すると、真田は、ま、まさ、政宗、殿で、よかろうか、などつつかえつつかえで、しかもまた赤くなつていて。

おい、何で俺の名前はつつかえんだよ。呼び難いか？ 千カの苗字の方がよつぽどだろうがよ、と突つ込んでみたが、申し訳ござらん！ とがばりと頭を下げられてしまい、それ以上は押揜えなくなつちまう。

気が抜けて肩を竦めれば、そ、某のことも幸村と！ ぜひ幸村と呼んで下され！ と顔を真っ赤にして頼み込まれてしまう有様で。

「OK。幸村。これでいいだろ？ 改めてよろしくな」

俺はいつも通りに口端を上げて見せた。そこで、幸村が何か言いたげにしたが、ちようど休み時間終了のチャイムが鳴り響いた。

「次は数学かよ。だったら俺よりチカかナリの方がいいかもなア」

一応机を寄せて教科書を見せながら、そう言うのと、某は、政宗殿に教えて頂きたく……と、幸村らしからぬ小声で言われた。何だコイツ。急におとなしくなりやがって。

「でもよ、ナリは学年一の秀才だぜ？ チカはムラがあるけど理数系は得意だしよ」

そう言うてなるべく幸村が授業を分かりやすく受けられるようにと、気を回してみるものの。「いや、結構でござる。某はここで、政宗殿に教えて頂きたい」

と俯いた顔から捨てられた子犬のような目で見られれば、あとは何も言えず。

そうか。コイツ何かに似てると思つたら柴犬だ。犬みてエな尻尾も生えてるし。自分で思い当たつてくすくす笑つてしまう。

「そんなにココがいいか？」

と、くつつけた机の上をとんとんと指先で叩くと、はい。某はこの席が気に入りました、今度は満面の笑みで答えられる。

何だよコイツ。項垂れた耳と尻尾がきゅつと上がつて見えた。随分感情が表に出やすいtypeだな。なんて、ひとりごちる。

こりや犬を手懐けると似てるな。我ながら失礼だとは思つたが、そう思わずにはいられないようなヤツだったのだ。この真田幸村と言う男は――。

*** **

目を覚ますとそこは真つ白い部屋だった。

いや、ここは……保健室か？ 薄いカーテンで仕切られて室内の様子はよく分からないが、俺の格好といい、この独特の匂いといい、保健室だろう。

気配を探ろうと再び目を閉じて意識を集中する。誰もいないようだった。

保健医もいねエのか。そういや長期出張だとかかって何日か前のHRで担任が言ってたか？ 誰もいない事に何となくほっとして、目を開ける。

目を開けたままぼんやりと天井を眺める。俺アマラソン中に倒れたのか。情けねエ。まったく、どこまでおかしくなりや気が済む。自嘲気味に頬を歪める。

そう言えば、最後意識が途切れる瞬間、幸村の声がした気がする。幻聴だったのか？ 俺ア、どこまでアイツを気にしてるんだ。

気になって気になって仕方がねエ程に。

ああ、これは――。

あの日、幸村が女子と抱き合っていた日に感じた苦しみ。アイツが呼び出されるたびに気にしないようにと、気を張っていた。気にしないように、気にしていた。

アイツの面影を思うたびに眠れなくて。

こんなに急速に。

そんな筈はないと思ひ込んでいただけか？

全然知らないうちに、アイツに全てを飲み込まれていくようで、怖くて、苦しくて、でも、一緒にいれば楽しかった。俺の方が、そうだ。アイツが俺に懐いているように見えて、実は、俺の方が……アイツに、惹かれていた……？

こんな、自分勝手に可愛くない俺に。素直になれない俺に。アイツは優しくかった。誠実だった。温かかった。

それがなぜなのか分からなくて、そんな風にされて動揺する自分が自分じゃなくなるようで、怖かった。苦しかった。こんな気持ち、俺は今まで知らない。気付かないうちに、アイツに心を奪われていたのか。

あの燃えるような目を見た時から、囚われていたのは俺だったのか。

あの目に射止められちまったのか。あの笑顔に絆されてあの目に射竦められて。

そして、夢を見た。

あの夢を見てから急激に変わった。俺の中での幸村という存在がでかくなりすぎて、そして、我儂な俺は距離を取り……。

ああ、何だ。

これ、結局自分だけが空回りしていたのか？ 一人で憂鬱になって眠れなくなつて、こんな、情けなくもぶつ倒れる程に。

「幸村……」

今までにあった事がどつと溢れ出てくる。

政宗殿、政宗殿と微笑まれ、ふと気付くと燃えるような目で見られている。

マサムネを呼ぶ時愛しそうに目を細めてまるで俺に語りかけるように話しかけていた。

全然掴めないヤツだと思っていた。

一人だけ思考回路がぶつ飛んで読めないヤツだと思っていた。

それが嫌で、だけど嫌じゃなくて。矛盾する気持ちを抱えたまま、俺は俺じゃなくなっている……。

憂鬱で、独りよがりで、どうしようもない状態になって。そして、そこには必ずアイツの、

幸村の存在があった。

——もう、認めるしかねえ。

俺は、ヤツが、——真田幸村が好きだ。

人としてもダチとしても惚れてる。あんなヤツ今まで周りにいなくて振り回されたが、それが決して嫌じゃなかった。ただ、変わってしまう俺が、自分が自分じゃなくなる感じが嫌だっただけだ。

幸村自身は嫌じゃないし、寧ろ最初から好感を持っていた筈だ。

転入してきたあの日。もう、アイツのあの態度に、性格に、惹かれていたのかも知れねえ。

だがしかし、ふと自分の考えに眉を顰める。

何で幸村が女子と抱き合っていた時あんなに怖かった？ 逃げた？ 俺らしくねえエ。口笛の一つでも吹いて揶揄ってやりやよかった。いつもの俺ならきつとそうした。

あれが佐助や慶次なら絶対そうした。幸村だからなのか？ 幸村だったから、できなかったのか……？

俺は、幸村に、そう言う意味でも、惚れて、しまったのか……？ 目を閉じて自分の考えを整理する。

よく考えろ。相手は男だ。俺とタメの、犬みてエなヤツだ。鬱陶しいぐらいに暑苦しくて、真っ直ぐで、優しく、誠実で、ちよつと堅物だけど温かくて、陽だまりみたいな笑顔を……ヤツ……だ。

かあ、と頬に血が上るのが分かった。

俺は、アイツの悪いところを見つけられねエ。寧ろ思えば思う程、いいヤツじゃねエか、と思ってしまう。

でも、最大の障壁があった。

アイツは、男だ。

俺がもしこんな気持ちになつていと知ったら、遠ざかってしまうかもしれない。それは嫌だと思つた。アイツに離れていかれる辛さは、身に沁みて知つている。

そのお陰で、ヤツの存在の大きさだとか、大切さだとか、知る切欠にはなつたが。

だが、今、それらを全て知り尽くした今、離れてしまうのは何よりも恐怖だった。このままダチとしていい関係でいたい。俺のこの気持ちなんか、そのためならば知らない振りをしていけばいい。欲張っちゃ駄目だ。

幸村に信頼されている俺を、アイツを、裏切るような真似はできねエ。

そうだ。しかもアイツには抱き合うような女がいるじゃねエか。今頃きつと、仲良くやってんだらう。

——目を閉じていても薄いカーテン越しに今がもう放課後だと分かる明るさだった。自分が振り回され続けて、やっと気がつけば、遅くて……。

閉じたままの左目がじわりと熱くなるのが分かった。

「エー 情けねエ。俺らしくねエ。」

生まれて初めて感じた感情は、思いは——。

これが、人を好きになると、言う事だったのか。

空回りして、怖くて、苦しくて、自分が自分じゃなくなるように、そして、温かくて……。

こんなにも人を思つて感情を揺さぶられるものだったのか。

これが、人に惚れるつて事か。

人を好きになつて、自分が分裂しそうになる、こんな感情は、知らなかった。今まで知ろうとしてもなかった。アイツに色々教えられた。それだけでもいい人生経験になったじゃねエか。

そうだ、そうやって割り切らう。俺の、きつと、初恋は。

今、終わったんだ——。

目を閉じたまま、零れそうな雫を堪える。

唇を噛み締める。

落ち着け。ぎゅつと布団の中にあつた両手を握り締める。

今、ひっそりと、俺は耐える。

傲慢で我侭で可愛げの一つもなくて、素直になれなかった俺には、似合いの結末だ。

そう思つて目を開けようとした時だった。

コンコンと小さくドアをノックする音がする。

誰だ？ こんな時間に。いや、時間は分からねエが、少なくとも今は放課後になっているだろう。部活の声や帰宅するらしい生徒の声や喧騒が遠くに聞こえている。

「失礼致す」

ガラガラと引き戸を開けて誰かが入ってくる。

「政宗殿？」

これは……！！

幸村だ。俺は開きかけた目を堅く瞑つて寝た振りをする。今、アイツに合わせる顔なんかねエ。何事もなくこの場を立ち去つてくれ。祈るような気持ちで目を瞑り続ける。

だが、そんな願いも空しくリリウムの床をきゅっきゅと鳴らしながら足音が近づく。カーテンの揺れる気配。一瞬ためらつたのか、入ってくることはない。

そうだ。そのままUターンしちまえ。俺は寝てる。アンタには待つてる女がいる。そのまま帰ってくれ……！！

怖いような気持ちで俺はじつとしていた。すると、ガラ！ と派手な音を立てて再びドアが開く。

「真田くん！ 酷い！」

女の声がした。

「し、静かにして下され！」

幸村が慌てて女の方へ近づく。

「ここは今具合の悪いお方がいらつしやるゆえ、どうぞ、お静かに」

頼み込むような幸村の声が聞こえたが、女はさらにわあわあとお喚く。

「寝てるんでしょ？ その人。そんなのほっとけばいいじゃん！」

「放つて置く事などできぬ！」

女の台詞を聞いた途端に語調を荒げた幸村がハツとしたように、ここでは、話し合いなどできませぬ。外へ出ましよう、女を促して廊下へ出る。

それでも廊下で喚く女の声は筒抜けだった。

「お昼休みの事、どう思ってるの？」

「あたし、置いていかれて超ショックだったんだから！」

「今だって、呼び止めても振り返りもしてくれないし」

女は激昂してきたのか、声に涙の色が滲み始めた。

「お静かに、と、申しても無理のようでござるな」

幸村の落ち着いた声もぼそぼそとだが聞こえる。

「では、申し上げるが。昼休みは、もう五時間目に食い込んでおったゆえ」

短く答える。

「だけど、グラウンドから大声がした途端走っていつちやったでしょ？ それまでは話聞いてく

れてたじゃん？ 何で一言言ってくれないわけ？」

「それは、その、……グラランドから、大切な方の名前を叫ぶ声が聞こえてきたので、慌ててしまいいました」

きつぱりと言いつ切る。

やっぱり、あの時見えた幸村は、声が出たのは、幻じゃなかったのか。

大切な方って……俺の事、か……？ 聞いてて恥ずかしくなってくる。聞きたくて聞いてんじゃねエ！ 聞こえてきちまうモンは、しょうがねエだろ。

「でもその人無事だったんでしょ？ 何で今も時間取れないの？」

鼻声に強気な台詞を乗せて女は喚く。

「その方の様子を見に伺ったのだ。申し訳ござらぬが、それ以上に大切な用事は某にはない」
幸村のその一言に一瞬水を打ったように静かになる。

「え、こんなに真田君の事好きなのに？ こんなに告白してるのに？ それ以上に大事って、何？」

女は喚くのをやめて涙混じりに訴えている。

「左様でござる。そなたには申し訳ござらぬが、某には心に決めた方がおりますゆえ」

ああ、あの抱き合ってた女の事か。

そりゃそうだよな。コイツが二股だとかそんな器用な真似でできるワケがねエ。

だが、この言い方は……まるで、ここに来る以外には大事な用事はねエと言ってるよう……

俺は混乱した。

何言つてやがるんだ？ あの野郎は。相手の女も困つてるじゃねえか。目を瞑つたままこの会話の成り行きを必死に考える。

「もうよいでござろうか。余りこの場で揉めるのは、避けたいのでござるが……」

遠慮がちに打ち切りたいと申し出る幸村の声がする。それでも、相手の女は、なおも食い下がる。

「なんで？ 納得できない！ 今日だつて誰からのチョコも貰ってないんでしょ？ あの日、あたしがぎゅってしてつて、お願いした時、してくれたじゃん。だから、あたし、オツケーなのかと思つてたのに」

「あれは、そなたの勢いが……！ 某がしたのではござらん！ そなたが抱きついてきただけではないか」

心外だとばかりに幸村の語調が強くなる。

何だと……？ この女、あの日の女だったのか。色んな情報が入ってきて、疲れていた俺にはそれを整理するだけで精一杯だった。

「とにかく、何度も申しておる通り、某はそなたの気持ちに応える事はできぬ。申し訳ござらんが、もう諦めて下され」

幸村らしい、誠実な拒絶だった。

「そんなに、その人が大事なの？」
それを聞いて女はしおらしい声で尋ねる。

「それはもう。この世の何にも代え難い程に」

ああ、この声。

愛しいものを愛しいと思う事に躊躇はないと、言い切った時のような声だ。

愛しいものを思い浮かべて、そして揺るぎない信念を持った声だ。

「ふうん。そっか。だから、そんなの持つてるんだ？」

さっきまでの激昂が嘘のように女は嬉しそうな声を出した。

「いや、これは！」

それに焦った幸村の方が今度は声を荒げる。何だ？ 何を持っていやがる？

「大声出さない方がいいんですよ？」

ふふと、女の笑い声さえした。

「そうでござるが……」

幸村はさらに追い詰められているようだ。

「本当はね、知ってたんだ。真田君に好きな人いること。でも、それでも諦められなかったの。凄いい好きだったから。だけど、こんなに真剣な真田君見ちゃったら……うん、しょうがないよね、だって……」

そこで、ここそと小声になって何事かを言う。最後に、

——と仲良くね！ と聞こえてパタパタと走り去る音が聞こえた。

「な！ 何を……っ！」

もういない相手に向かって、中途半端に叫んだ幸村は、そろりと、再び保健室に入ってきた。

何だったんだあれ。女は諦めたらしいが……。

最後の会話は何だ？ 幸村には好きなヤツがいるのか？ しかもあの女も知ってる？ 誰だ？ 俺は気になってしょうがなかった。

あの女が抱き合っていた女だった。だけど、それは幸村にしたら事故みたいなモンで……。そして幸村の、心に決めた方ってのはあの女じゃねエ。そこまでは分かった。

じゃあ、誰なんだ？ あの女の言い方だと、誰なのか知られてる……？ 俺が、俺だけが結局何も知らないのか？

何で、こうも、アイツの事に振り回されちまうんだ。こんなにまで、アイツの事が、気になるのか。そんなに、俺は、アイツの、幸村の事が好き、なのか……。

途方もない気持ちになった。もう、さっき終わったばかりなのに。俺の気持ちの行方は行き場を失い宙ぶらりんだ。

だけど、諦めるしかねエ。そうだ。いくらコイツが俺に優しくしても、温かくても、それはダチとしてだ。コイツに迷惑かけるような事はしちやいけねエ。

俺は、俺の気持ちに蓋をする。それがきつと一番いい事だと思えた。
「政宗殿、お騒がせして申し訳ござらぬ」

俺が起きているのか寝ているのかも分からないのに、幸村は律儀に謝ってきた。目を瞑ったままびくびくして幸村が出て行くのを待つ。

こんな状態で幸村に会いたくなかった。今気付いて、今決まった俺の気持ちの行く末。でも、頭ではそう決めても、心が、未だ、追いついていなかった。

再び、きゅつきゅと足音が近づいて、カーテン越しに幸村の気配を感じる。

「政宗殿？ お加減は如何でござろうか」

静かに声をかけながら、失礼致すと、カーテンを開けられる。

きた！ 俺は、びくりと肩が揺れそうになるのを必死で堪えた。

「政宗殿？ 未だ眠られておるのか……？」

俺を見ただろう幸村が静かに呟く。何だよコイツ。何しにきやがった。早く出て行けと、そればかりを念じる。

「お荷物を、お届けに参りました」

返事がないにも関わらず、幸村は俺に話しかける事をやめない。

「先程は、煩くしてしまつて、申し訳ござらん」

再度、さっきの騒ぎを謝ってきたかと思うと、ベッド脇にあつたパイプ椅子がぎしりと音を立てる。

コイツ、座りやがったのか。

出入り口の方へ背中を向ける形で横になつていた俺は、背後からしか幸村の存在を確認できない。幸村はそんな俺の背中に向かって話しかける。

「政宗殿。政宗殿が倒れられたのを見た時、某は心臓が止まるかと思ひましたぞ」

「元就殿にお聞き致したが……ここ最近眠れていなかったと。なぜ、そのような無茶をなされた」

「何がそこまで、政宗殿を苦しめているのか……」

オメエだよ！ と内心激しく突つ込むが、声に出しては言えない。おとなしく寝た振りを決め込む。

「某では、その苦しみを取り除く事はできないのでござろうか……」

「あの日、誓った通り、某は政宗殿を誰からも傷つけさせたくござらん。何者からも苦しませたくはない。あらゆるものからお守り致したい」

「某では、お役に立てないのであろうか……」

幸村は物憂げな溜め息を吐くと、ふわりと、俺の頭を撫でた。

「こんな風に眠られていても、政宗殿はお美しい」

ゆるゆると頭を撫でられて、心臓がどンドン早くなる。

「政宗殿……」

手が止まったかと思うと、再び椅子がぎしりと鳴って、旋毛の辺りに、kiss された。と、思う。

「寝ている政宗殿にこのような真似をして、卑怯だと思われるであらうな」

唇が頭で動く気配がする。小さく小さく幸村は呟くが、起きている俺には全て聞こえていた。何で、コイツ、こんな真似しやがるんだ？

「政宗殿。政宗殿と知り合つて、もう一月以上経ちました。某は、初めて政宗殿を見た日以来、政宗殿の事が忘れられぬ。日に日に政宗殿の存在が大きくなって、苦しいのでござる」

何を言ってる？ コイツは、今、何を言い出した？ 俺は混乱の坩堝にいた。何だこれ？ どう言う事だ？ どきどきと心臓はどンドン忙しくなる。幸村の声が耳元で聞こえすぎて顔に熱

が集まるのが分かる。

「佐助に、それは恋だと言われたが。某もそう思います。このような気持ちになったのは、初めてでござるゆえ、最初は戸惑いました。ですが、佐助に指摘され、政宗殿の事を考えて……。思えば思う程、政宗殿が、……——愛しい」

後頭部にこつんと、幸村の額が当たると。

「眠られている政宗殿にしか、この気持ちを伝えられぬ某の意気地のなさを、どうか、責めないで下され」

「この幸村を不甲斐ない男と、詰らないで下され」

「男同士で、このような気持ちになってしまった某を、政宗殿は気味悪がるだろうか。某は、それが怖い。このような気持ちを貴殿に募らせている事が知れて、……嫌われてしまうのが、耐えられぬ程に恐ろしい……！」

「何よりも大切だと思う政宗殿に、離れていかれる苦しみを、某は知っている」

「政宗殿が某から距離を取っていた時期、あれは、この気持ちが知れてしまったのかと思ひ、酷く不安でござった。政宗殿に離れていかれるのは、もう、嫌なのでござる……！」

「あのように苦々しい事になるならば、某はこの気持ちに蓋を致す。政宗殿のよき友人として、側にいたい……」

鼻声になってきた幸村の震える前髪が耳にかかって、思わずびくりとした。

「ヤベェ！ 起きてる事がばれちまう！ 内心焦りまくった。」

それは、幸村も同じだったらしい。

がぼつと起き上がったかと思うと、
がたんと音を立てて椅子から立ち上がった。そのまま、
シャツとカーテンが開く音がする。

*** **

——やられた。

あの燃えるような目で見つめられ、あのしつとりとした男の声でこんな事言われちゃ堪らねエ。頭の天辺から湯気が出るかと思う程顔に熱が集まる。緩みきっていた心臓が嘘のようにきゆうと引き絞られて早鐘を打ち鳴らす。

「政宗殿が先程話していた内容。某が寝不足の原因と言うお話でござる」
急に話が戻って俺は幸村の顔を見た。

「あれは、某の勘違いでなければ、政宗殿からの、愛の告白と受け止めてもよろしいのだろうか。某には政宗殿が、某の事を好いてくれているように、周りのおなごたちに、妬いてくれているように感じられたのだが……、如何でござろうか」

コ、イ、ツ……！

もう、ワケが分からねエ程、顔が熱かった。

「政宗殿の仰る事は、遠回しで、少し意地悪でござったが。そこが、政宗殿らしくて、可愛らしい」

ふんわりと微笑まれて、俺は、もう、降参だと思った。

「Saito 悔しいが俺の負けだ。押揃いすぎたな」

それが、出てきた最大の負けず嫌いだった。押揃いすぎて何度ミイラ取りになったか。それ

を、忘れてたワケじゃなかったが。

ただ、幸村の気持ち、俺と同じだった事に浮かれて、緩んでいた。コイツが、揶揄いすぎると、豹変したように、……その、……かっこよくなっちゃう……のを、知っていたのに。

握られていた手が震えた。ああ。俺ア、コイツの事が好きだ。

今、実感として胸にじんわりと温かいものが広がる――。

「アンタの手、熱過ぎるんだよ。これじゃチョコが溶けちゃうぜ」

掠れきった声で、やっとそんな事を言う。幸村がそれを聞いて手を離したので、床に置いてあった自分の鞆に突っ込む。

「Thanks……、アンタの気持ち、確かに受け取ったぜ」

そう言つて俺は目を閉じた。視界がぶれたからだ。情けねエ。たつたこれしきの事で。

だが、人を好きになると言う事は、恋をすると言う事は、こんなにも感情が揺さぶられて、気持ち悪くて、苦しくて、辛くて、切なくて、そして、何て甘やかで、温かいのか。

「政宗殿」

閉じた瞼の縁をなぞられる。濡れているのが分かつて恥ずかしかったが、そのままにしておいた。

幸村の手の何と優しい事か。こんな無骨な、骨ばった手が、こんなにも優しく動くのか。それは、俺だけに与えられた特権かと思うと、さらに喜びが込み上げる。

目を開けて幸村を見る。どうしよう。ヤベエ。

俺以上にコイツがヤベエ。

何て熱っぽい目で俺を見るのか。コイツ、こんな顔もしやがるのか。こんな顔のコイツを誰にも見られたくないと、馬鹿みたいな気持ちになる。

そしてふと思いつく。

……：「そういや、ファミレスで俺の顔見てコイツおかしな事したな。」

「なア、アンタ、前にファミレスで財布忘れたとか言っただろ？　ありや、何でだ」

幸村は、う、と詰まったかと思うと熱っぽかった眼差しを緩めて答えてきた。

「あれは、あの時の政宗殿の顔が、その、やばかったのでござる。あのようなお顔で、目で、見られては、食事などできませぬ。……それに、あのようにお可愛らしい顔を、不特定多数に見られるのは、嫌でござった」

それを聞いて啞然とした。

俺は、あの時そんなにみつともねエ顔してたのか。自分でも確かに、どんな顔してたんだ、とは思っていたが……。

「オイ、そんなに俺の顔は酷かったのか？」

思わず眉間に皺が寄る。

「酷いなどとは言ってはおりませぬ。可愛すぎたのでござる。その、こういう事を、したくなる程に……」

言いながら幸村が俺の頬に唇を寄せてきた。

ちゅ、と音がしてすぐ離れる。

コイツ、あんなに前から、そんな事思っただけか！　かあ、と再び頬に熱が集まる。

「アンタ、思ったより大胆だな。破廉恥破廉恥って煩エから、もっと初心かと思ってたぜ」
悔し紛れに、つい、悪態を吐く。

「政宗殿にならば、某は、唯一、その……破廉恥な気持ちに、なりますゆえ……」
かかかか、と幸村の頬が赤くなる。それすらも、今の俺にとっては喜びとなって、胸の、鳩尾の辺りがきゅうと引き攣るようになる。

「Oh! It's So Crazy……」だが、アンタに思われるのは悪くねエ」
ベッドの縁にあるままの幸村の顔を、初めて、自分から撫でた。

「アンタ、つるつとしてんなア」

触った感触を言えば。

「それは、政宗殿の方こそでござる。色が白くて、つるりとしてて、柔らかで……」

言いながら幸村も俺の頬を撫でてくる。

「もう一度、口付けても、よかろうか」

俺の頬を撫でながらきゅつと目を細めて耐えられないというような顔をして、幸村が聞いてくる。

「い、いちいち聞くな！」

恥ずかしくて俺は枕に顔を伏せた。横向きに寝ていたから、右半分は出たままになってしまったが。

嬉しそうに破顔した幸村に、では、と髪をかき上げられて、右頬が露になると、再び唇が落ちてくる。耳に髪をかけながら耳朶もそろりと撫でられる。

うう。なんか変だ。耳なんかこんな風に触った事もねエし、触られた事もねエ。思わず肩を竦めた。竦めた肩をよしよし、とでも言うように撫でられる。

そして、ちゅ、ちゅ、と音を立てて俺の眼帯から何から、見えている部分に全てE.S.S.をしてくる。

コイツ、ほんとに、犬みてエだ。そのうち耳にまでE.S.S.をしてきた。ぞぞぞ、と今まで感じた事のない感覚が這い上がってきて、俺は思わず顔を上げた。

「……ッ、今のは何だ？」

「何だとは、何でござろうか」

急に顔を上げた俺に驚いたのか、幸村も不思議そうな顔をしている。

「アンタが耳にE.S.S.した時、ワケが分かんねエ感覚がきた」

何度も自分の手で耳を擦る。

「それは……。えっと、……お嫌でござったか？」

しどろもどろに聞かれる。

「No. 嫌かどうかまでは分からねエ。ただ変な感じがした」

正直に答えた。分からない事があるのは納得いかねエ。

「では、もう一度試してみて、嫌ならやめると言うのは如何でござろうか？」

顔を上げた俺の両頬を両手で撫でながら幸村が笑いかけてくる。

「んー、まア、それでもいいか」

痛いワケでもないので、それを了承した。

「では」

短く告げると、幸村は再び俺の頬に、脛に、目尻に、こめかみに、額に、鼻に、唇を落とすてくる。

擦ってエ！ さつきは右側だったから眼帯に覆われていて分からなかったが、こんなにも顔つてのは神経が敏感だったのか。

そして、耳にちゅ、とされた。うううう。やっぱり、ぞぞぞ、とする。びくりと思わず肩が竦む。——その時だ。

「政宗殿」

囁くような、幸村の声がした。

「政宗殿、お慕いしております」

その、声、は、駄目だ……。

そして再びちゅ、と耳にキスされる。熱が籠ったように耳が熱くなるのが分かった。何だこれは。

いつの間にか幸村に後頭部ごと頭を支えられていて、もう片方の腕に抱き締められていた。幸村の心臓が、胸の筋肉を破りそうな程の勢いで脈打っているのが伝わる。俺の心臓も同じぐらいの強さで脈打っていた。

ああ、コイツも俺も、同じなんだ。そう思うと何となく安心した。幸村が立ち上がって、ベッドの上に乗り上げてくる。ぎしり、と安物のベッドが軋んで耳障りだと思った。

そう言えばさつきまで聞こえていた喧騒がなくなっている。カーテン越しの光も柔らかいオ

レンジ色だ。

ぼんやりとそんな事を思っていると、幸村の唇が耳から動いて、顎をなぞる。それから、右手の親指で俺の唇をすつと撫でて、顎にあつた唇が重なつた。

何だコイツ！ 男同士で気持ち悪くねエのかよ？

ちゅ、ちゅ、と何度も啄ばまれる。

唇が離れて俺は思わず思つた事を口にした。

「アンタ、男同士で気持ち悪くねエのか？」

聞けば。

「政宗殿の事を愛しく思う事はあれど、気持ち悪いなどと……それとも、政宗殿は気持ち悪うござつたか？」

俺の唇を何度も撫でながら、逆に質問で返される。

そういや、驚いたけど、別に気持ち悪くは……なかつた。

……幸村以外とは、想像もしたくなかつたが。

「No. 気持ち悪いとかは、ねエよ」

気持ち悪くなかつたのが恥ずかしくて、ぶいっと横を向く。

「それならば安心致した。某は、政宗殿に、こうする事ができて、嬉しゅうござる」

ぎゅうと抱き締められる。

「何度、こうする事を夢見たか。もう数え切れぬ……」

幸村は切なげに耳元で囁くと、横を向いていた俺の顎に噛み付く。痛くはねエ。そつと歯を

立てられて、ぴりりと、痺れが走る。

「……うッ」

小さく呻いてしまった。

噛み付いていたままに、舌先を俺の唇の端に掠めてきた幸村は、こちらを向いて下され、と囁く。

俺は言われるがままに再び幸村を見た。その途端、再び唇を啄ばまれる。今度は噛み付いてもきた。痛くはねエが。コイツやつぱり犬か？　とも思う。

ふっとそんな事を思って笑った瞬間、するりと、幸村の舌が入り込んでくる。

「政宗殿、随分楽しそうな顔でござる」

口の中に舌を入れたまま、幸村は喋った。

不規則に動く舌は、俺の舌を掠めて、上顎を掠めて、歯の裏側まで舐めた。それから、耳を塞ぎたくなるような音がする程、夢中でkissしあつた。歯がぶつかって痛くて、それでも離れられなくて。口の中にお互いの唾液が溜まって、これどうすんだよ、と思っただけ、飲み込んだ。

幸村の喉仏も動いていたから、きつと、俺たちは同じ事をしたんだと思う。

口の端からよだれが垂れて、気持ち悪かったけれど、一瞬だけ目を開けていただけで、後は閉じたまま、夢中で唇を重ね合った。気がついたら幸村の首に腕を回してたい程に。背筋が震える程に。それくらい気持ちよかった。

さすがに苦しくなって、唇を離れた頃、お互いに笑った。

酷エ顔だった。口の周りはべたべただし、顔は赤いし、息は上がってるし。唇ははれぼったかったし。何て酷エんだ。

そして、笑い終わった頃、幸村が口を開いた。

「某、政宗殿と致す事の全てが、初めてでござる」

きっぱりと言い切った幸村に、再び顔が熱くなった。

Kissしたばかりでもうこれ以上赤くはならないだろうと思っていたのに、まだ熱が集まる。

「お、俺だつて、……ッ、」

そこまで言うのが精一杯だった。駄目だ。恥ずかしすぎる。○○○を気取ってきた俺が、こん

な事で息を上げているのはみつともねエ。

だけど、こんなところでも強がりの虫が騒ぎやがる。

「某たち一緒ですな。とても嬉しい」

素直に喜ばれる。それが、嬉しかった。人を好きになると言う事は、こう言う事かと、こんな

なところでも実感した。相手の喜びが自分の喜びになる。相手が嬉しければ自分も嬉しい。

遠い昔、まだ右目があった頃に、優しいピアノの上手な先生にそんなような事を教わった気がするが、あの頃理解できていた単純な事が、分からなくなってたんだな。

そして今、幸村によって再び学んだ。一生忘れられない情熱と共に。

幸村、アンタと出会えて、俺は幸せモンだ。自然とそう思えた。思いながら俺から Kiss し

た。アンタが、Album を見せながら俺に、政宗殿に出会えて幸せだと、伝えてきた言葉。今、

俺は本当の意味で理解したかも知れねエ。

なア、もつと、色々知ってるんだろ？ アンタは俺にない温けエモン、たくさん持つてるじゃねエか。俺に色んな事、気付かせてくれたじゃねエか。

俺ア、アンタとなら……！！

俺から幸村にしがみつこうようにキissした。

コイツの全部を受け取ろうと。俺の全部を渡そうと。ガチガチと何度も歯が当たって全く〇〇じゃなかったが、それでも俺たちにとつては十分甘くて切なくて愛しい行為だった。

「はあ……、ま、さ、むね、殿……」

肩で息をして幸村が俺を覗き込んでくる。

俺は幸村の膝の上に乗り上げるような形で、ヤツの首にしがみついていた。まだまだ。もつと。コイツの熱は、こんなモンじゃねエ。

「なア、アンタ、もつと色々あんだろ？ 俺が知らなかったモン、たくさん持つてるじゃねエか。俺にくれよ」

俺は単純に Kiss と言う行為の魅力に取り付かれたし、幸村とこうする事でアイツの持つてる温けエモンが俺にも流れてくるようで、幸村とする Kiss が好きになっていた。

ちゅ、ちゅ、と啄ばむようにしては幸村の顔を覗き込む。ヤツの目を見ては再び、ちゅ、ちゅ、と唇を降らせる。

「まさ、むね、殿……！！」

切なげに苦しげに幸村は俺の名を呼ぶと、膝に乗せた俺を抱えたまま、ベッドに寝かせてきた。

「政宗殿に差し上げられるものは、某自身しかございませぬ」

俺は寝かされた事に驚いてきよんとしていた。

「そのように潤んだ目で可愛く強請るなど、反則でござろう……!」

幸村はよく分からない事を呟くと、俺のジャージに手を伸ばしてきた。

「What! 何すんだアంత。寒イだろうが」

ジーと閉じていたファスナーを下ろされながら、俺は抗議した。

「もう、無理でござる。政宗殿に思いを受け入れてもらえ、なおかつ、このようにされては…

…!」

くつと唇を噛み締めると、幸村は上履きも履かずに歩いて保健室の鍵をかけた。足早に戻ってくるかとカーテンを隙間なく閉めて、俺の上に覆い被さるようにして再びベッドに乗り上げてくる。

「Hey, 何する氣だ」

俺は幸村の行動が理解できずに、問いかけた。

「政宗殿が、欲しいと仰られた。某の持っているもの、全てを差し上げようとしているのでござる」

幸村は熱っぽい目で俺を見つめて囁くと再び俺にkissをしてくる。

——ああ。コイツのkissは好きだ。コイツとしかした事ねエけど。もう、一生コイツとだけいいや。本当にそう思えた。

大切なものを扱うように、優しく啄ばんできたかと思うと、唇全部を食べるような勢いで深

く口付けられる。この Kiss ヤベエよな。ポーっとしてくるぜ。ごくと口に溜まった唾液を飲み込んだ頃、フアスナーを下ろされて開いたままだったジャージの袖を抜かれた。寒くて嫌だったけれど、必死に脱がそうとしてくる様が可愛くて、俺も腕を抜くのに協力してやった。Tシャツだけになった俺は心許なくて、ぶるりと身震いしたが、すぐさま幸村に抱き締められる。

「寒いでござろうが、暫し我慢して下さい」

幸村はぎゅっと俺を抱き締め直すと、腕を解き片手で俺のTシャツの上を撫で始める。その間も俺の顔中いたるところに Kiss をしては鼻や顎に噛み付いてきて。痛くねえんだけどよ。やっぱり犬っぽいよな。また笑いそうになったとき、衝撃が走った。

「……………ッ！」

びくと体が跳ねた。

「痛かったでござろうか？」

心配そうに幸村が上から覗き込んでくる。

「No. 痛くはねエが。……今のは何だ」

視線を幸村の手がある辺りに向ける。

「ここを、少し、触ったのでござるが……」

申し訳なさそうに、同じ事を俺の胸の上で再現する。

「……………ッ！」

まただ。

これはダメだ。電気が走り抜けるみてエな鋭い感覚が背筋を突き抜ける。

「それ、ヤベエ。ダメだ」

短く伝えれば。

「駄目、とは……?」

言いながら再び幸村の手が、俺の胸の上で動く。

「……ッ! それ、ダメだっつってんだろ!」

幸村を突き飛ばしたくなつたが、力が入らねエ。何だこれ。これのせいかな? SHIT! ワケ

の分からねエ感覚に俺は悪態を吐く。

「政宗殿は、きつと、敏感なのでござろうな」

ふふ、と幸村に微笑まれて気が抜ける。枕に頭を戻す。何なんだよ。

幸村の唇が降りてくるので、俺はそれには応えた。E.SSは好きだ。

再び口の周りまでべとべとにされて、ふんわりした気持ちになつていると、今度はそのまま幸村の唇が首筋や鎖骨の辺りまで降りてきて。ちゅ、ちゅ、と吸われたかと思うと、喉仏や鎖骨の窪みに舌を這わされて、ちゅ、と痛みが走る。

「SHIT! アンタやっつきから何しやがる!」

ぐいと、ヤツの尻尾を掴み上げる。

「……政宗殿に某を全て差し上げるための準備でござる」

あの子犬のような顔で上目遣いに覗き込まれる。クソ。こんな時にそんな顔は狡いぜ。——それこそ反則だ。

「もういい。E.S.S.がいい」

俺は正直に答えた。大体これ以上男同士でどうするってんだ。……ねエだろ？

「それでは、某の全てを差し上げる事はできませんゆえ」

言いながら幸村は自分のセーターとシャツを脱ぎ始める。

細いけれど、均整の取れた綺麗な腹筋が見える。似たような体格だけど、コイツの方が重たい筋肉ついてるよな。俺はダメだ。何か軽い。細エのが嫌だし。骨格がきつと幸村の方が骨が太いんだろうと思う。

畜生と思つて幸村の胸から腹にかけて割れている道を指でつつつ、となぞる。

「ま、政宗殿お！ 某をからかつておられるのか！ 挑発するだけして、政宗殿は、可愛らしいのに……悪魔のようでごさる！」

泣きそうな顔で俺に覆い被さつてきた幸村に、ええいとばかりに、俺もTシャツを脱がされる。

「……寒イ」

幸村のあまりの勢いと剣幕に圧されて、それだけ一言ぼそりと呟いた。

「すぐ、温めますゆえ」

ぴたりと、裸の胸と胸が合わさる。

——う、これは……。

温けエ！ 思わず、すりつと幸村の首筋に顔を寄せた。

「温けエ」

そう言えば、よかったでござると微笑まれて。

温かい幸村の腕の中で俺はすっかり安心しきつて、うとうとしそうにさえなった。今まで眠れなかった分が一気にきたように。

「政宗殿。寝られては困りますぞ」

苦笑混じりに、ちゅ、と唇を重ねられる。

「Hum……眠イ……」

唇を食まれながら寝惚けたような声で返事をする。眠イと喋った口の中にそのまま幸村が舌を入れてきて、俺はあーんと、口を開けたまま受け入れていた。

もう、好きにしてくれ。俺は眠イんだ。そうだ。コイツにならきつと委ねられる。今だってこんな、肌と肌が触れ合っているも気持ちいいとは思っても気持ち悪イとは思わねエシ。

「う、ん」

唇が離れて顎を食まれて、首筋に再び、ちり、と痛みがする。幸村の指が俺の胸を辿って見つけた、とでも言うように一箇所で止まる。

きゅ、と指で押されて背筋に衝撃が走る。これ！ さっきも感じた！ さっきより刺激が強エ。

「う、……ッ」

びくんと肩が揺れる。

「それ、ヤベエって。俺女じゃねエしよ」

——声にも力が入らない。

幸村はその声が聞こえていのか聞こえていないのか。

「初めて同士ゆえ、色々大変かと思えますが、政宗殿は、どうぞそのまま置いて下され」

首元に埋めていた顔を上げて、幸村はあの燃えるような目をさらに赤くさせて俺の顔を覗き込んでくる。その目は……ダメだ。俺はこくと頷いて、黙って目を閉じた。

再び幸村に首元に顔を埋められて鎖骨にも歯が当たる。柔らかく噛まれてちり、と痛みを残される。慣れてくればさほど痛くはなくなつたけれど、触れられるたびに、ぴくり、ぴくりと体は揺れてしまう。

ちゅ、と音を立てながら幸村が俺の胸元に下りてきて、今度は触っていないかっただ方の胸の突起にまで *kiss* される。

「……ッ！ う、あ、」

今まで以上に体が揺れる。

「政宗殿。何と、お可愛らしい」

口に含まだまま喋られて正体不明の悲鳴が上がる。

「はッ、やめろ！ それ、そのまま喋んな……！！ う、ふう……」

俺は悲鳴を上げたことが恥ずかしくて、口元に腕を持つていき、そのまま自分で塞いだ。幸村が俺の胸を吸って、甘く噛む。

そのたびに俺の口からは、ふ、く、とくぐもつた声が漏れる。

足がシートを引っ掻いて暴れ出したような衝動に駆られるけれど、幸村の足に挟み込まれていて、それも叶わない。

幸村の骨ばった指で俺の胸の突起を弄りながら、反対側は唇で吸い上げたり、舌先で尖ってきたところを転がしたりされる。そのたびに感じた事のない衝撃が背筋を駆け抜けて、ゆらゆらと体が揺れる。

「な、ア……それ、……おかしくなる」

幸村の腕を掴んで揺ると、顔を上げてくる。

「……！ 何、と、……お可愛らしい顔をされているのか……」

うっとりとした表情で、幸村は胸元にあつた手を俺の頬に持つてきて柔らかく撫でてくる。

「お嫌か」

ちゅ、ちゅ、と顔中にkissしながら聞いてこられて、俺は迷った。

嫌？ 嫌、では、ねエ。だけど、この感覚は……言葉には表せないけれど、何かおかしいんだよ。

「嫌じゃ、ねエ、けど、」

自分でも驚く程か細い声が出た。

「嫌ではないのでしたら、そのまま、政宗殿の感じるままに、どうぞ、某に教えて下され」

幸村に肩を撫でられながらこめかみにkissされて。

「アンタ、これ以上何かあんのか？ なア、男同士でこんな事して、どうすんだよ？」

耳にかかる幸村の息が擦ったくて、笑ったような声になる。

「これ以上……あり申す。……男同士でも、好き合う者同士ならば、大丈夫でござる」

俺だってバカじゃねエ。……ここまでされりや分かる。Sexシーモンがどういふ事ぐらいかは、

——知ってる。

ケドよ、男同士ってできんのか？　そう聞けば、幸村は微笑んでできると言う。
「……アンタ、何でそんな事知ってる」

一瞬怪訝な雰囲気になった俺を宥めるように、髪を梳きながら幸村は答えた。
「っ！　誤解なさらなくて下され。某は正真正銘、政宗殿が初めてでござる」

慌てたように言い募った幸村の言葉に、一瞬間が開いて。

「その、政宗殿を恋うるようになってから、……いつか、このような日が来た時のためにと、……多少は、学んでおりましたゆえ……」

かあ、と真つ赤になつて最後は蚊の鳴くような声で言うのと、軽蔑しないで下されと、ぎゅうと抱き締められて——。

「政宗殿が愛しくて、仕方ありません。傷つけたくござらん。そのために必要だと思つての事でござる」

首元に顔を埋めて火照つた頬を押し付けられる。

「疚しい気持ちがないとは、……言い切れぬ。某は、政宗殿を思うと、……このようになってしまふので、」

そう言つて俺の太ももに幸村の腰が当てられる。

「……ッ！」

熱イ！　火傷するかと思う程熱くて、硬いものが、当たつた。コイツ、俺でこんな風になるのかよ！

思わずびくんとした俺に。

「申し訳ござらん。ですが、決して政宗殿の不興を買いたくとした事では、ござらぬ……」
と、今にも泣きそうな声で告げる。

その弱々しい声に驚いて、思わずよしよしと、頭を撫でた。

「How. 俺だって全部初めてだ。アンタ以外とは、こんな事死んでもご免だが、——アンタと
ならいいぜ。……アンタになら、許す」
そうだ。

俺は、コイツになら全部くれてやると思ってたんだ。一生コイツだけでいいと、さっき思えた
んだ。ならば、男同士でもこの、お互いの情熱の交換ができるのならば、幸村が恥を忍んで俺
のためにここまで言うのならば。

「Alright. 俺も男だ。アンタが言うなら信じるぜ」

ぎゅうと幸村を抱き締め返して、眼帯を外した。

「俺のこの顔を見ても『ソレ』がまだ元気ならな」

くく、と笑ってやれば。

「何を仰るか！ この傷を初めて見た日、某がどれ程……心打たれたか。——政宗殿は、まだ、
某の気持ちを理解されてはおらぬ……！」

幸村は苦しげに呻くと、何の躊躇もなく俺の右目に口付けてきて。

「愛しい、愛しい……。政宗殿の全てが愛しい」

謔言のように呟きながら俺の傷を舐めてくる。

もう感覚すらない筈の右目が熱くて、びりびりと背筋が震えて、俺は言葉もなかった。

——ああ、コイツは本物だ。俺ア、とんでもねエヤツに惚れちまったのかも知れねエ。

そう思って俺は、静かに左目も瞑った——。